

中学校 第1学年 道徳科 学習指導案

愛知県東海市立名和中学校
教諭 阪本 景子

主題名 相手の立場に立って

教材名 4 二人の言い分（1時間）

内容項目 B 相互理解・寛容

本時のねらい いじめの定義や法について理解し、いじめを生まないためのトラブルの解決方法について話し合うことを通して、相互理解の大切さに気づき、相手の立場に立って考え行動しようとする判断力を養う。


指導時期 5月頃

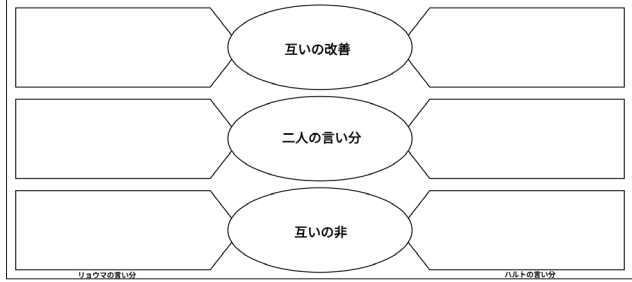
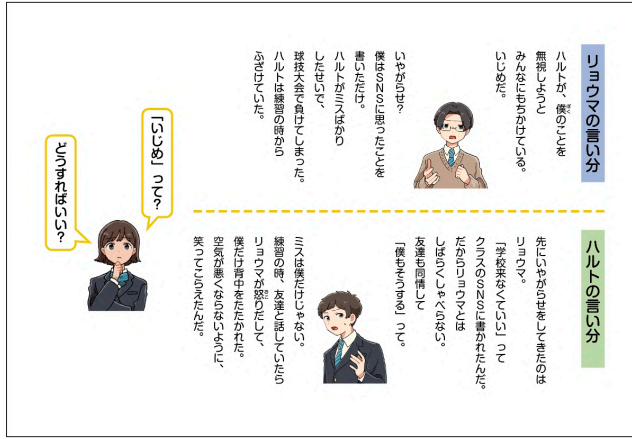

「指導者用デジタル教材」活用の意図・目的

学習を進めるにあたり、教材全体の流れや登場人物の心情の変化を学級全体で共有し、共通理解を形成するためには、従来の紙の教科書による指導に課題があると感じていた。特に、読み取りが部分的になりやすく、印象に残った一文や一場面のみを根拠に判断し、「どちらが悪いか」といった単純な対立構造で捉えてしまう傾向が見られた。その結果、登場人物それぞれの背景や葛藤、おかれていた状況への理解が十分に深まらず、沈黙や迷い、心の揺れといった言葉として明示されていない内面に目を向けることが難しい場面もあった。こうした学習では、「いじめはいけない」という一般的な価値の確認にとどまり、なぜその行為が相手にとって苦痛となったのか、どのような関わり方があれば防ぐことができたのかといった内省的な学びにつながりにくいという課題が残っていた。

そこで、本時では生徒の思考を構造的に支えることを意図として、「指導者用デジタル教材」に搭載されている「思考ツール」や「整理しよう」、「さし絵・写真」を活用することを考えた。「整理しよう」「思考ツール」を用いることで、出来事・言動・受け止め方といった要素を切り分けて整理し、生徒が感覚的・断片的に捉えていた内容を多面的に捉え直すことができるだろう。また、「さし絵・写真」を提示することで、場面の雰囲気や登場人物の表情を視覚的に共有し、文章には表れにくい心情や内面を想像する手がかりとした。さらに、「思考ツール」への入力や学習支援ソフトウェアを活用することで、生徒一人一人の考えを可視化し、学級全体で共有・比較しながら対話を深めることができると考え、本実践に取り入れた。

本時の展開

	活動内容	デジタル教材の活用
導入	<ul style="list-style-type: none"> 「指導者用デジタル教材」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 「指導者用デジタル教材」の「思考ツール」にある「キャンディーチャート」を、生徒に配付する。 	 <ul style="list-style-type: none"> 事前に「キャンディーチャート」に記述項目を入れておくと、生徒が活用しやすい。

	活動内容	デジタル教材の活用
導入	<p>1. いじめについて考える。</p> <p>T：いじめとは、どんなことか。</p> <p>S：たたいたりからかったりすること。</p> <p>S：悪口や無視など、相手を傷つけること。</p> <p>●学習者用端末に入力させる。授業支援ソフトウェアで、各自の考えを共有する。</p>	
展開	<p>2. 「二人の言い分」の前半（教科書p.22～23）を読み、ハルトとリョウマのトラブルについて整理する。</p> <p>T：二人の言い分から、何が起こったかを整理し、「互いの非」について考えよう。</p> <p>S：練習時からふざけていたハルト。</p> <p>S：ハルトの背中をたたいたリョウマ。</p> <p>3. 「二人の言い分」の後半（教科書p.24～25）を読み、いじめの定義を知り、二人はどうすればよかったかを考える。</p> <p>T：「された人が心身の苦痛を感じている行為はいじめ」ということから、ハルトとリョウマの言い分を考えよう。</p> <p>S：SNSへの書き込みや、「しばらくしゃべらない」と友達に話したこともいじめ。</p> <p>S：背中をたたくこともいじめ。</p>	<p>●「整理しよう」を提示し、教材の流れを整理する。</p>  <p>●生徒に口頭で説明させようで、「キャンディーチャート」の下列に、「互いの非」を入力させる。</p> <p>●「いじめ防止対策推進法」を確認し、「キャンディーチャート」の中列に、「二人の言い分」を入力させる。</p> <p>●互いに言い分があり、どちらが悪いとは言えないことに気づかせる。</p> <p>●同じ言動でも、感じ方、受け止め方は人によって違うことをおさえる。</p> <p>●「さし絵・写真」を適宜活用する。</p>  <p>●どの行為もしてはいけないことだと認識させようで、どちらの言い分も、一方だけが正しいとはいえないことに気づかせる。</p>

	活動内容	デジタル教材の活用
展開	<p>T：ハルトとリョウマは、それぞれどうすればよかったのだろう。</p> <p>S：SNSへの書き込みはしない。</p> <p>S：無視の呼びかけを周りに伝えない。</p> <p>S：たたくなどの暴力はふるわない。</p> <p>S：対面して、互いの考えを聞き合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●「キャンディーチャート」の上列に、「互いの改善」を入力させる。 ●意見共有をする際、改善内容をできるだけ「～する」のように、行動目標を示すことができるように助言する。 ●「さし絵・写真」を適宜活用する。 
終末	<p>4. 相互理解のための話し合いや、寛容に受け止めようとする大切さについて考える。</p> <p>T：「いじめを生まないためにはどうすればよいか」「トラブルが起きてしまったらどうすればよいか」について考えよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の生活を振り返らせ、どのようにしたらよいかを考えさせる。 ●「さし絵・写真」を適宜活用し、教材の場面を振り返る。  <ul style="list-style-type: none"> ●学習支援ソフトウェアを使い、各自の考えを表示して共有する。

「指導者用デジタル教材」を活用したことで得られた効果

「思考ツール」や「整理しよう」を活用し、出来事・言動・受け止め方といった要素を整理しながら考えさせたことで、生徒は印象的な一場面のみで判断するのではなく、物語全体の流れや背景をふまえて捉え直すことができるようになった。特に、「互いの非」「二人の言い分」「改善策」といった視点を段階的に整理して示すことで、「どちらが悪いか」という単純な対立的判断に陥ることを防ぎ、多面的に考えようとする姿が見られた。

また、「リョウマの言い分」「ハルトの言い分」といった異なる視点を「さし絵・写真」を用いて意図的に切り替えて提示し、場面の雰囲気や登場人物の表情を共有することで、文章には明示されていない沈黙や迷い、心の揺れといった内面に目を向けやすくなった。その結果、同じ出来事であっても感じ方や受け止め方が異なることを生徒が視覚的に理解しやすくなり、「された人がどのように感じたか」という視点から考えようとする発言が増え、相手の立場に立って考える道徳的対話を深めることができた。

さらに、「思考ツール」への入力や学習支援ソフトウェアを活用することで、生徒一人一人の考えを可視化し、学級全体で共有・比較することが可能となった。これにより、発言が苦手な生徒も自分の考えを表現しやすくなり、多様な意見を基に話し合いを進めることができた。指導者にとっても、生徒の考えの傾向を即時に把握し、共通の画面を基に発問や切り返しを調整しながら授業を進めることができ、学級全体の思考の方向性をそろえやすくなるという効果があった。

終末では、整理した内容を基に教材の場面を振り返り、自分の生活に引きつけて考えさせることで、「いじめはいけない」という価値の確認にとどまらず、「どのような関わり方をすればよいのか」という具体的な行動として考える姿が見られた。このように、「指導者用デジタル教材」を活用することで、教材理解の深化とともに、相手の立場に立って考え、行動しようとする判断力や態度の育成につなげることができたと考えられる。